

読書の扉

ドナルド・キーン『渡辺崋山』を読む
(新潮社 07年3月刊 四六判 356頁)

下山 房雄 (かながわ総研元理事長)

本稿は14年前、2001年10月刊の本誌「研究と資料 113号」に書いた「渡辺崋山のこと」の続稿である。旧稿には、石川惇『渡邊崋山』(1941)と崋山「千山万水図」(1841)についての随想あるいは論評があった。前者については崋山の逮捕と救援のさまが「治安維持法弾圧下での様々な生き方を想起しつつ」書かれたとの解釈を、後者については「中遠景に海洋国家日本の客観状況が描かれ、近景にはその状況を自覚せぬままに人々が生きている閉塞した日本の姿が描かれているとの断絶構造」との解釈を、私は与えている。この「千山万水図」が、崋山自刃の地＝渥美半島田原市の博物館に秋田県の奈良氏から寄贈され、その公開展覧会がこの春に行われた。そのことを知って、かねがね訪ねたく思っていた三河田原を企画展終了日の前日＝5月23日に訪ねた。出版された時に読みたいと思いながら読めないうきたキーン『崋山』を事前に読むこともした。

当日朝、小田原7:04発の「ひかり」が豊橋停車の列車でこれを利用して、豊橋鉄道終点三河田原駅に8:50に着く。まず駅前の城宝寺で崋山の墓参り。両脇に妻＝たかと母＝栄の墓碑が並ぶ。それから田原城址にある博物館で寄贈された「千山万水図」およびもともと博物館所蔵の山水図稿本などを鑑賞。さらに、1840年1月20日～翌年10月11日自刃の期間、蟄居した池ノ原屋敷のある公園を経て標高250mの蔵王山に登り、そこから北に三河湾、南に田原の街と太平洋を眺めるといった一日を過ごしたのである。

この日帰り旅行の予習的に読んだキーン『崋山』の読後感を一筆。肖像画家としての崋山を中軸に崋山の多面的生涯が描かれている本書であるが、何よりもキーンの日本文化についての教養の広さ深さに改めて驚嘆する。だがここでは二件についてだけコメントを書く。

まず私が旧稿で「果てなく広がって行くさまの大洋と想ったのは実は湖」と書いた「千山万水図」の不思議な構図をそうとは解していないことがある。海ではなくて湖だと書いた崋山論を私は知らないのだが、キーン崋山論もそうで「力強く描き出しているのは、山々がそびえ、湾や入り江が複雑に入り組んだ海岸線」と書き、「海と空とが水平線で出会う画面上方」(270頁)から画面下方に目を移せば、水が落下して滝と成り川と成る図であることの指摘は無い。何故？

キーン『崋山』への新聞評を私は2点、保存していた。一点は東京新聞07年4月17日夕刊のコラム「大波小波 転向画家・渡辺崋山」、もう一点は赤旗07年4月30日のコラム「朝の風 渡辺崋山をどう評価するか」である。東京コラムが「身の不幸をもたらした海防政策思想も、すぐさま反省し意見を撤回した様を、後のプロレタリア文学の転向作家になぞらえている」と書いている点を、赤旗コラムは「崋山を一九三〇年代の Kommunismusからの転向者になぞらえるなど、検討の求められる点」と書く。そこで私は、石川『崋山』を想起しながら、キーン『崋山』がこの転向問題をかなり展開的に論じているのかとの先入見で本書を読んだのだが、キーンに関連叙述は以下のごとく簡単明解なものであった(244頁)。一崋山は「西洋科学や国政・外交に関する知識を未だに信じていた。しかしこれらの知識を断念しなければ、死が待っていた。…崋山は昭和初年の転向者たちと立場を同じくしていたと言える。その真偽はともかく Kommunismusを捨て、日本の聖なる使命に目覚めた転向者たちと一」